



## ✧ 研究会報告 ✧

「帝国日本」境界の祭祀再編と海外神社班 2021 年度研究会

# 沖縄神社の創建とその後

日 時：2021 年 4 月 24 日（土）13:00~14:30

場 所：Zoom 会議

報告者：嵯峨井 建（京都國學院講師、神道学博士）

上田 由美（神奈川大学大学院歴史民俗資料科学研究科 博士後期課程）

4月24日、嵯峨井氏が「沖縄神社の創建とその後」と題して、Zoomを介して報告された。内容は、まず大正末に首里城内に創建された沖縄神社について、その発端から創建の目的、推進者、創建後の境内の施設を解説し、沖縄戦で破壊されるまでの流れを追った。そのうえで、首里城内での沖縄神社の日常や社会的、宗教的活動などを論じた。さらに、戦後の沖縄神社が弁ヶ嶽に仮神殿を建立した経緯など、戦後の復興についても述べた。最後に沖縄神社の性格についてまとめた。以下、報告に沿って要旨を記したい。

### 琉球処分前の状況

琉球の文献における神社創建記事の初見は、1451（宝徳3）年那覇久茂地に天照大神を祀った長寿宮が創建されたというものである。同時に長寿禅寺が創建され、神仏習合であった。1942（昭和17）年に浮島神社と改称され、1988（昭和63）年波上宮に仮殿として祀られた。王家の支援を受けて存在した琉球八社は、神宮寺と隣り合わせであり、神仏習合であった。氏子制が存在しないため、近代に入ると運営が困難になった。

沖縄神社は、かつて首里城にあった。首里城は、琉球

国王の居城であり、祭政一致体制の中心だった。焼失前の図を見ると、正殿を中心に東側から、「御内原（おうちばら）」、「御庭（うなー）」、「京の内（けおのうち）」の三つに分かれている。「御内原」は国王と王妃家族と女官たちに限られ、余人の入域を許さぬ聖域だった。沖縄神社はこの「御内原」の奥に鎮座する。国王が亡くなった後に亡骸を仮置きする旧寝廟殿（しんびょうでん）の位置とするのは誤りで、旧金蔵に位置していた。「京の内」には5カ所、聞得大君をはじめ神女（かみんちゅ）たちが祭祀を行う御嶽があった。御内原とあわせ全部で「十嶽（とたけ）」と呼ばれる10カ所の御嶽が首里城に存在した。正殿で国王は政務と祭祀を行い、冊封儀礼も行われた。二階南東隅にある「おせんみこちゃ」の空間に火神（ひぬかん）が祀られ、王が毎日拝んだ。「世誇殿」（よほこりでん）は王女の住まいで、王の崩御時は王位継承儀礼の場となる。王子は、即位儀礼のために初めて入ることができた。

1872（明治5）年琉球国が廃止され、9月に琉球藩とされた。1879（明治12）年、琉球処分が行われた。尚泰は松田道之より首里城退去を命ぜられ、中城御殿（なかぐすくうどうん）に入った。文書等が没収された。



図1 焼失前の配置図（首里城パンフレットより）

祭祀関係資料については不明である。尚泰は東京へ行き、華族となる。1901（明治34）年8月19日に59歳で亡くなると、玉陵に葬られた。

## 沖縄神社創建までの経過

県民の熱烈な敬神崇祖の念から沖縄神社創立の議が起こった。『沖縄県神社庁三十年史』によれば、内務省神社局に祭神を照会している。創設案は3度却下され、次のように第4次事業で創立された。

### ①第1次事業 祭神：尚泰王・舜天王・源為朝

1910（明治43）年4月25日、同年9月10日付で地元が内務省神社局に祭神を照会したが、回答内容は不明である。1912（明治45）年2月12日沖縄県民事務課より、天皇即位五十年祝典記念として県社創立案を提出。明治天皇の崩御で具体化せずに中止された。

祭神の尚泰王は、第二尚氏第19代最後の琉球国王。源為朝は平安末の武将で、武勇で知られ保元の乱で流罪になり自害したが、生存説が伝説化し、運天港に漂着したとされる。舜天王は初代琉球国王で、源為朝の子とされる。

### ②第2次事業 祭神は不明

1914（大正3）年11月7日、波上宮境内に県社として並置する案を内務省神社局長に照会し、不可の回答があった。

### ③第3次事業 祭神：尚泰王・阿摩弥姑・志仁礼久

1915（大正4）年12月3日県議会で「県社創立の件」が上程され、可決。翌年10月1日、願書を内務省へ提出した。

祭神は、本土のイザナミ、イザナギのように、阿摩弥姑は琉球開闢の女神、志仁礼久は男神。3柱の祭神が不適切とされ却下された。

### ④第4次事業 祭神：舜天王・尚門王・尚敬王・尚泰王・配祀源為朝

1923（大正12）年3月31日、ようやく内務省より沖縄神社創立許可を受ける。創立奉賛会が組織され、9月に造営着工。

祭神の尚門王は第二尚氏の初代国王で、長女が初代間得大君。尚敬王は第二尚氏の13代国王である。

社地案は、5カ所転々とした。当初は首里地内適当地、〔奥武山公園〕、旧王城内（首里城）。1914（大正3）年には波上宮境内案。翌年に首里区真和志町の拝所案。最終的に1923（大正12）年から1945（昭和20）年の22年間、首里城に鎮座した。

## 創建の推進者と施設

創建是那覇地方裁判所検事正島倉龍治が、内務省へ持ち込んで実現した。この時、伊東忠太と鎌倉芳太郎が、解体の危機のあった首里城を、沖縄神社拝殿とすることで守った。伊東は文化財の権威であり、沖縄神社をつくるために首里城を壊そうとしたのではなく、壊そうとき

れた時に神社創建案があり、渡りに船で首里城を拝殿とした。伊波普猷・比嘉春潮・真境名安興など沖縄学分野の人物による見解については、ほとんど確認できない。東恩納寛惇も、賛成していない。

沖縄神社の位置は旧金蔵（こがねくら）跡で、様式は典型的な神明造である。拝殿は旧首里城正殿を利用した。祭儀の実際については不明である。社務所は、旧世誇殿を正殿真後ろから北側へ移築、転用した。後の調査により社務所跡からは、瓶子蓋、湯飲み（沖縄神社・尚家の紋）の破片が発掘された。首里城の境内周辺は、1875（明治8）年以降、敗戦の1945（昭和20）年まで、70年間文教地域として使用された。

## 沖縄神社の姿—日常・社会的・宗教的活動

一村一社運動の推進者だった鳥越憲三郎（1914-2007）の言説が、戦後の「沖縄神社」観を醸成した。鳥越は、1942（昭和17）年に沖縄県の囑託として祭祀などを調査した。そして、神祇院へ御嶽の神社化を説いた。彼は1年ほど首里城南殿に妻子と住んだが、戦後にその見聞を否定的に語った。当時戦争末期であったため、沖縄神社に参拝者は見当たらなかったのだが、日常的に参拝されない神社だったとした。それは目撃談として谷川健一、上田正昭などに引用、孫引きされ、「皇民化の中でつくられ、信仰実体のない神社」であると予断にみちた言説の元となった。しかし、実際には生きた「沖縄県の県社」だった。1923（大正12）年に創立奉賛会が組織され、沖縄県下の全島から募財活動が展開された。県の支援は当然であるが、県民の浄財が投入された神社であった。例祭日10月20日は休日となり、様々な神賑行事が行われた。前夜祭には、拝殿前舞台で琉球踊りなど余興が奉納された。旧王府の路次楽が演奏され、行列が行われた。例祭には、知事、もしくは代理など要人が参列した。沖縄神社で行われる行事が、その時代を生きてきた沢山の人の心に、忘れがたい楽しい思い出として記憶されているのである。

## 戦後の沖縄神社—壊滅から弁ヶ嶽へ

沖縄神社は、1945（昭和20）年5月12日、アメリカ軍の爆撃で焼失した。1948（昭和23）年12月、GHQの計画に基づき跡地に琉球大学が設立された。

1960（昭和35）年、首里文化部、首里市会議員、同各町有志による沖縄神社再建の議が起こった。この時、首里城正殿から東方の境内地返還を琉球大学に要請したが拒否された。そこで翌年、首里支所長又吉盛弘、首里各自治会長、鳥堀町や汀良町の有志、料亭小川などにより、沖縄神社仮神殿を弁ヶ嶽入口の柱に建立した。以来現在まで、波上宮の兼務社として運営されている。弁ヶ嶽はかつて国家祭祀の聖域で、国王の健康や国家安穩を祈願等するため、国王の参拝、代参が行われた拝所であった。沖縄神社は、琉球祭祀の重要な聖地に鎮まったの



写真1 現在の沖縄神社

である。

### 沖縄神社の性格

沖縄神社は、「海外神社」ではない。1600社におよぶ東アジアの海外神社は、大半が天照大神を祀った。それは、現地では「異国の神」、「日本の神」であった。しかし、沖縄神社は琉球国の三代の国王、王の父源為朝を祀っている。埋葬地と対になる一種の「宗廟」である。また、近代に創建された神社で、旧「県社」である。琉球・沖縄の神を祀った神社であった。

以上が嵯峨井氏の報告内容である。報告後、活発に質疑応答が展開されたが、特に議論になったのは、「沖縄神社は海外神社か」という問題であった。嵯峨井氏は、「海外神社」は祭神が天照大神であることが一つの判断の基準で、祭神が「異国の神」であることだとした。これに対し、次のような意見が出された。

- ・台湾などの例もあり、必ずしもそうは言えないのではないか。また、時期的に1930年代には、在地の神である「国魂神」、「国魂大神」という考えが出てきた。土地の神、例えばチンギス・カンのように国土を開拓した功績者の人格を持った神が出てくる。沖縄ではどうか。
- ・沖縄は行政の範囲としては県なので、そこに「国魂神」を読み込むのは難しい。沖縄神社を含めた琉球の神社は、内地の神社と「海外神社」をつなぐ部分として、歴史的にも地域的にも非常に重要な研究対象になる。「海外神社」研究の導きになるものだ。
- ・沖縄神社に歴代の国王と共に為朝が祀られているのは、日琉同祖論として重要である。
- ・台湾と樺太は天照大神ではなく、開拓三神である。沖縄神社に国王等が祀られるのは、土地の功績者としてということで、植民地神社と変わらない。為朝の場合は、台湾における北白川宮と変わらない。海外神社を考えるうえの素材は、そう変わらないのではないか。

- ・あてはめるといふより、近代日本をどう考えるかという問題である。沖縄の神ではないが、沖縄人が受け入れやすい神を持ってきた。近代の神社のつくり方を考えることが、日本のなかでの沖縄、台湾を考えることにつながる。それまでの琉球八社と近代の沖縄神社との違い、琉球王を祀るなら廟であり、考え方はいろいろある。沖縄神社は、海外神社を考えることの橋渡しとなる。
- ・首里城のなかでどう位置づけるのか。鳥越氏の役割についても検討が必要。御嶽を神社に変えようとしたというが、役割は単純ではない。琉球処分の問題もある。
- ・「海外神社」をとおしてバリエーションがある。それらを考えることが近代を考えることである。実態をあきらかにすることが大切。戦後の話も含めて考えると、いろいろなものが見えてくる。
- ・「海外神社」建設のピークは1930年代だが、それ以前は明治天皇崩御、大正天皇の即位の時であった。朝鮮、台湾でも同様である。



写真2 沖縄神社拝殿

そのほか、沖縄神社拝殿の写真(写真2)に見られる龍柱の向き、昭和に復元された際の図面3枚(沖縄県立博物館所蔵)など首里城の資料についての議論もあり、様々な論点が出された。今後はZoomでなく対面での研究会で、今回出された論点を含め、「海外神社」の研究が深められることを希望する。

図と写真は全て嵯峨井氏の提供によるものです。感謝いたします。

#### 【主な文献】

- 沖縄県神社庁設立三十周年記念誌編纂委員会編『沖縄県神社庁三十年史』(沖縄県神社庁、2005年)
- 伊東忠太『琉球：建築文化』(東峰書房、1942年)
- 鎌倉芳太郎『沖縄文化の遺宝』(岩波書店、1982年)
- 鳥越憲三郎『琉球宗教史の研究』(角川書店、1965年)
- 鳥越憲三郎『沖縄の天皇制』(谷川健一編『沖縄学の課題』木耳社、1972年)
- 真境名安興、島倉龍治『沖縄一千年史』
- 文化庁編『戦災等による焼失文化財』(便利堂、1983年)